パーリ語『ジャータカ』の動物活躍譚

――現在物語・過去物語を往来する人類・異類の生存の交流――

中村　史

はじめに

人類と異類、異類と人類の関係や交流は文学作品の中でどのように描かれているだろうか。日本の古代文学ならば、一つには、『古事記』『日本書紀』の神話に見られる神婚譚あるいは異類婚姻譚がある。例えば、神代記・神代紀に収められた海幸・山幸神話の豊玉姫と火遠理命（ほおりのみこと）の婚姻譚では、天皇家の祖に海神（→鰐鮫（わにざめ））の血が入る。

インド文学でも、神・龍・阿修羅等の女性と人間の男性が夫婦となる異類婚姻譚はよく見られる。その最もよく知られた例は、『シャタパタ・ブラーフマナ』等に見られるウルヴァシーとプルーラヴァスの美しい恋愛譚[1]であろう。

ウルヴァシー　→　アプサラス（天女）　→　異類の女性

プルーラヴァス　→　人間の男性

という夫婦関係が、ウルヴァシーの課した禁忌をプルーラヴァスが破ることによって一旦途絶するも、のちに修復し、子孫の繁栄に至る、というストーリーである。しかしながら、人間の男性と、明らかに人間とは異なる姿をした「動物」をその本体とする女性との恋愛・婚姻譚はあまり無い。『マハーバーラタ』第三巻一九〇章[2]の、パリクシット王が蛙の王女と夫婦となり、子孫が生まれるという話は希有な一例である[3]。

また、日本に仏教が伝来したのち、日本の古代文学に、輪廻転生・因果応報を前提とし、人間が悪報として動物に生まれ変わったという世間話を語る仏教説話が現れる。現存最古の仏教説話集『日本霊異記』（『日本国現報善悪霊異記』）では、上巻第一〇縁、上巻第二〇縁、中巻第九縁、中巻第一五縁、中巻第三二縁等が、強欲によって寺物を私用した者が死後に牛に生まれ変わるという話群である。これらはむろん『冥報記』等の中国仏教説話の影響を受けたものであるが、インドの仏教説話に起源を求めるとするならば、アヴァダーナ文学の系譜にあると言える。しかし、アヴァダーナ文学にはこうした人間の動物への転生を説く説話は多くない[4]。

それでは、インドの説話文学では、動物が人間からかけ離れた存在であったかと言うとそうではなく、人間が前世に動物であったと語る因縁譚は多くある。その宝庫と言うべきはアヴァダーナではな

く、ジャータカの文学である。それら因縁譚は、ある人間が前世に動物であったからと言って決して陰惨でも暗澹としたものでもなく、前世に人間であった場合と異なること無く、ユーモラスで明るい。本稿では最も纏まった数の話材を提供するパーリ語『ジャータカ』を考察の範囲とする。また、（まもなく述べるように、ジャータカの主要部分である過去物語において）動物を主人公や重要な登場人物とするジャータカ説話を「動物活躍譚」と名付け、それらを考察の対象とする。

一

『ジャータカ』はパーリ語で伝わる上座部仏教の聖典の一つである(5)。そこに集成された全五四七話のジャータカは、現在物語、過去物語、連結という三つの部分から成り、こうした構造の点から言えば、世界に広く存在する枠物語の一種である。

現在物語とは――仏が比丘達に何らかの教えを説くために、過去・前世の出来事を語りはじめるまでの設定を語る物語であり、現在、いわば歴史的現在の時制を取る。

過去物語とは――現在物語の設定において仏によって語られる、実にさまざまな、あるいは勇壮なあるいはユーモラスな、過去・前世の物語である。そこには語り手である仏も、前世の姿である人間や動物の主人公、あるいは主人公格の重要な人物として登場し、賢い働き、勇ましい働きといった偉業を成す。

連結とは――過去物語が語りおえられたのち、時間が現在（現在物語の現在）に戻り、仏が比丘達に向かって、過去物語の登場人物の誰が、仏自身を含めて、現在の誰なのかを説き明かすものである。

ジャータカの過去物語には動物を登場人物とするものがきわめて多くある。ジャータカと重複・交差するが対照的な性格のアヴァダーナが動物を登場人物として持つことが稀である(6)のとは対照的である。ジャータカの過去物語では、しばしば人間と動物それぞれの社会が存在し、両者の間にさまざまな交流・交際、会話が行われる。動物は動物としての性格を保ちつつ、人間のように思考し会話をする。また、動物の社会のみで出来事が完結していたり、異種の動物間のやりとりが行われたりすることもある。これらが動物活躍譚である。こうしたジャータカの過去物語にはヒンドゥー教説話集『パンチャタントラ』や『ヒトーパデーシャ』の説話と類型のもの(7)もあり、仏教説話もヒンドゥー教説話もともに民間の伝承から材料を得ていたことを推測させる。

ジャータカの過去物語は、それ一つの単純構造ではなく、現在物語と連結に挟み込まれている。そのために、ジャータカ中の時間は、現在→過去→現在と変化し、動物活躍譚を持つジャータカでは、それに従って、登場人物の存在形態が、しばしば人類→異類→人類と変化する。

二

パーリ語『ジャータカ』には、教団やその関係の有名人物の逸話、また、仏の人間関係について語る一群がある(8)。その中では、仏の従兄弟でありながら仏教僧団の分裂を引き起こしたデーヴァダッタ（提婆達多）をこき下ろし批判するものが圧倒的に多い。デーヴァダッタが仏を害そうとしたこと、また、デーヴァダッタの残忍さ、愚かさ、恩知らずのほど、身の程知らずのさまが繰り返し語られる。

それらのジャータカの過去物語には、主人公、主人公格の動物が登場する動物活躍譚がきわめて多い。

二の一

仏は前世においてしばしば仲間を率いる優れた鹿や猿等の動物の王であり、デーヴァダッタはその兄弟であったりする。仏は群れの仲間を守ったが、デーヴァダッタは守らなかった、あるいは仏の群れの者達を害しようとして失敗したと語るものである。

第一一話「ラッカナ鹿ジャータカ」：仏は前世に託された群れの鹿を守ったラッカナ鹿であった。自分の群れの鹿を守れなかった兄弟のカーラ鹿はデーヴァダッタであった。

第一二話「ニグローダ鹿ジャータカ」：仏は前世に身ごもった雌鹿の身代わりとなった慈悲深い鹿の王であった。身代わりになるのを断ったもう一匹の鹿の王はデーヴァダッタであった(9)。

第二〇話「葦飲みジャータカ」：葦の茎の内側が空洞になっているのは、仏の過去の護念による。仏は前世に機略に富んだ猿の王であった。蓮池に住み猿達を喰らった悪鬼はデーヴァダッタであった。

二の二

また、とかく前世においてもデーヴァダッタは動物としての存在の仏を害しようとしたが、仏は優れた知恵や機転によって逃れたと語るジャータカも多い。デーヴァダッタはしばしば悪意ある動物、人間、特に猟師である。

第二一話「羚羊（かもしか）ジャータカ」：仏が前世に羚羊であったとき、猟師の策を見抜いて逃げ去った。猟師はデーヴァダッタであった。

第五七話「猿王ジャータカ」：仏が前世に猿王であったとき、自分の心臓を取ろうとする鰐から機転によって逃れた。鰐はデーヴァダッタであった(10)。

第五八話「三つの徳ジャータカ」：仏が前世に猿王の息子であったとき、息子を殺そうとする父王を克服して王位に即いた。父猿王はデーヴァダッタであった。

第一四二話「ジャッカル・ジャータカ」：仏が前世にジャッカルの王であったとき、死人のふりをして殺そうとする賭博者に騙されなかった。賭博者はデーヴァダッタであった。

第二〇六話「羚羊ジャータカ」：仏が前世に羚羊であったとき、猟師の罠に掛かり殺されるところであったが、友達の啄木鳥（きつつき）、亀に助けられた。猟師はデーヴァダッタであった。

二の三

あるいは、前世においてもデーヴァダッタは仏の真似ばかりしていたが、常に失敗したと語るジャータカもある。それらは仏やデーヴァダッタの言動を動物の習性になぞらえ、デーヴァダッタを愚かなもの、滑稽なものとして笑う。

第二一〇話「カンダガラカ啄木鳥ジャータカ」：仏が前世に啄木鳥であったとき、仲間の啄木鳥は彼の真似をして固い樹をつついて死んだ。真似をした啄木鳥はデーヴァダッタであった。

第二〇四話「ヴィラーカ水鳥ジャータカ」：仏が前世に水鳥であったとき、彼の真似をして魚を捕ろうとした鳥は溺れ死んだ。真似をした鳥はデーヴァダッタであった。

二の四

また、前世にもデーヴァダッタは忘恩の徒であったと強調するジャータカにおいて、しばしば仏やデーヴァダッタは動物であった

り、話の型そのものが動物報恩譚であったりする。

第一七四話「裏切り者の猿ジャータカ」：仏が前世にバラモンであったとき、喉の渇いた猿に飲み水を与えたものの糞を落とされる等の忘恩の行為を受けた。猿はデーヴァダッタであった。

第七二話「シーラヴァ象王ジャータカ」：仏が前世に象王であったとき、ある猟師を救ったが、猟師は象王の象牙を奪って破滅した。猟師はデーヴァダッタであった。

第七三話「恩知らずの王子ジャータカ」：仏が前世に苦行者であったとき、川に流される王子、蛇、鼠、鸚鵡を救った。蛇、鼠、鸚鵡は恩に報いたが、王子は悪念から仏を殺そうとした。王子はデーヴァダッタであった。

二の五

同様に、前世においてもデーヴァダッタは悪人であった、このような悪人に染まってはならないと主張するジャータカもある。

第二六話「マヒラームカ象ジャータカ」：仏が前世に王臣であったとき、盗賊の凶暴な言葉によって凶暴になった王象マヒラームカに戒めを守る者達の言葉を聞かせて落ち着かせた。盗賊はデーヴァダッタであった。

第一四一話「蜥蜴とカメレオン・ジャータカ」：仏は前世にカメレオンと付きあう息子に忠告した蜥蜴の王であった。結局蜥蜴一族に破滅をもたらしたこのカメレオンはデーヴァダッタであった。

二の六

ジャータカの説話では、手段を尽くし、徹底的にデーヴァダッタを攻撃する。この節の最後に、デーヴァダッタは自分にふさわしくない聖者の印を身に付けていたと述べるジャータカを挙げておこう。

第二二一話「袈裟ジャータカ」：仏は前世に独覚のふりをして象牙のために象を殺す男を追い払った象王であった。象を殺した男はデーヴァダッタであった(11)。

三

ジャータカは全て仏の賞賛を究極の目的とするものであるが、直ちには仏を賞賛せず、まずは何らかの教え、徳目を説こうとするものも多くある。過去物語においてこうした教え、徳目を主題の中心にしていても、現在物語と連結の作る枠に嵌め込まれることによって結局は仏の偉大さを説き、仏を賞賛するものとなる。そうしたジャータカにもしばしば動物が主人公、あるいは主人公格の登場人物として現れ、その動物としての特性を発揮しつつ、活躍をする。

三の一

例えば、無常の教え、平静の教えを説き、煩悩、貪欲、執着を戒め、恩に報い、施しを行なうことを教えるジャータカにも多くの動物活躍譚がある。

第一五九話「黄金色（こがねいろ）の孔雀ジャータカ」：仏が前世に黄金色の孔雀であったとき、バーラーナシー王に捕まって無常の教えを説いた。

第一〇五話「死を恐れる象ジャータカ」：仏が前世に樹神であったとき、死を恐れる象に平静の教えを説いた。

第二一九話「非難ジャータカ」：仏が前世に猿の首領であったとき、人間に飼われていた猿が猿の群れに戻って来て人間の煩悩を非難した。

第四二話「鳩ジャータカ」：仏が前世に鳩であったとき、仏に付い

て来て魚を食べようとした貪欲な烏は身を滅ぼした。

第一四八話「過ちを悟ったジャッカル・ジャータカ」：仏が前世にジャッカルであったとき、死象の体内に入って肉を貪り喰らったのち瀕死の体験をして、その結果貪りを捨てた。

第一七八話「住まいに執着して死んだ亀ジャータカ」：仏が前世に陶工であったとき、涸れゆく湖に執着して命を落とした亀を捕らえ、亀から聞いた教えによって、人々に執着すべきではないことを説いた。

第一五七話「ジャッカルに恩返しをしたライオン・ジャータカ」：仏が前世にライオンであったとき、恩人のジャッカル夫婦を虐待する妻を諭した。

第三一六話「兎ジャータカ」：仏が前世に兎であり、猿・山犬・獺（かわうそ）とともに布施行をしていたとき、あるバラモンに自らの身を焼いて与えようとした(12)。

三の二

増長すること、身の程をわきまえないこと、増上慢を戒めるジャータカはまた数多く存在する。それらのジャータカにおいて、ライオンとジャッカル、ハンサ鳥と烏のように、インドの文化の中で優劣・上下の関係が定まっている動物達の間に、彼らの関係に応じたさまざまな出来事が起こる。

第一四三話「自惚れたジャッカル・ジャータカ」：仏が前世にライオンであったとき、従えていたジャッカルがライオンと同じ威光を自分も備えていると慢心して自滅した。

第一五二話「恋に陥ったジャッカル・ジャータカ」：仏が前世にライオンであったとき、妹ライオンに言い寄ったジャッカルを退治した。

第一五三話「猪ジャータカ」：仏が前世にライオンであったとき、悪臭を嫌うがために汚物にまみれた猪に勝利を譲ったが、自分の力ゆえと勘違いした猪は身を滅ぼした。

第一六〇話「王の真似をした烏ジャータカ」：仏が前世にヴィデーハ国王であったとき、あるハンサ鳥が雌烏との間に息子を作った。この烏をハンサ鳥の息子たちが父の許へと丁重に運ぶとき、驕り高ぶった烏の息子は自らをヴィデーハ王になぞらえて破滅した。

第一七二話「ライオンの真似をしたジャッカル・ジャータカ」：仏が前世にライオンであったとき、ライオンの真似をして吼えるジャッカルが厭われた。

第一八七話「四つの美を備えたものジャータカ」：仏は前世に樹神であり、二羽のハンサ鳥の雛と親しくなったが、雛たちはジャッカルを嫌がった。

第一八八話「ライオンの真似をしたジャッカル・ジャータカ」：仏は前世にライオンであり、雌のジャッカルとの間に息子を得た。ジャッカルの息子はライオンの真似をして吼え、諌められた。

第二〇五話「ガンガー河の魚ジャータカ」：仏の前世においてガンガー河の魚、ヤムナー河の魚、亀がそれぞれの美を争った。仏はその一部始終を見ていた樹神であった。

第二二七話「糞喰虫ジャータカ」：仏の前世において、糞の匂いを嫌って逃げる象を見て自分を恐れて逃げると勘違いした糞喰虫が象に挑戦して殺された。仏はこれを見ていた神であった。

三の三

ジャータカにはまた集団の和を説くものがよくある。僧団・出家

者の和合のみならず、在家の信者達が仲良きことも重要であるのでこれを説こうとしたと思われるが、それらのジャータカの過去物語にもしばしば動物活躍譚が見られる。次のジャータカのうち第二七話は、過去物語において仲の良い象と犬が現在物語では出家者と在俗信者と明かしているので、出家・在家の集団の関係が良好であるべきことを教えていると考えられる。

第一七話「風ジャータカ」：仏が前世に苦行者であったとき、いつ寒さというものがあるかについて対立・口論する虎とライオンを仲直りさせた。

第一五四話「蛇ジャータカ」：仏は前世に蛇と金翅鳥を仲直りさせた苦行者であった。

第一六五話「鼬（いたち）ジャータカ」：仏は前世に鼬と蛇を仲直りさせた苦行者であった。

第二七話「いつもジャータカ」：仏が前世に王臣であったとき、王象が仲の良い友達の犬を失って落胆しているのを知って犬を取り返させた。

三の四

長上者を尊重しその助言に従うべきであるという教えを主眼とするジャータカもある。過去物語が動物活躍譚となっている例を挙げてみよう。次のジャータカのうち第三七話は、最年長者を尊敬することの功徳を説いている。

第一五話「カラーディヤー鹿ジャータカ」：仏は前世に鹿であったとき、甥の鹿に術策を授けようとしたが、甥は言うことを聞かず罠に掛かって命を落とした。

第一六話「三通りの姿を取る鹿ジャータカ」：仏は前世に鹿であったとき、甥の鹿に術策を授け、甥はよく言うことを聞いて罠の危難を逃れた。

第三七話「鷓鴣（しゃこ）ジャータカ」：仏は前世に象・猿の年長者たる鷓鴣であり、象・猿は年長者への礼を弁えた。

三の五

ジャータカの説話群において、言葉による罪、口業はまたさまざまな形を取って戒められる。過去物語が動物活躍譚となっている例を挙げてみよう。第二一五話は、まず声を発することの無い亀がおしゃべりによって身を滅ぼしたと語るのが、教訓的でありつつも聞き手を笑わせるところであろう。第一九八話は、『鸚鵡七十話』等において賢い生き物と見られている鸚鵡があえて忠告を控えるという行動を取る話であり、忠告の意味の無い者に忠告することを諌めるジャータカとなっている。

第二一五話「亀ジャータカ」：仏は前世においてバーラーナシー国の大臣であったが、二羽のハンサ鳥によって空中を運ばれる亀がおしゃべりによって身を滅ぼした。仏はこれを見て王の饒舌を諌めた[13]。

第一九八話「ラーダ鸚鵡ジャータカ」：仏は前世に鸚鵡であったが、飼い主であるバラモンの妻の不貞を見ても飼い主への通告を控えた。

三の六

男性にとって、愛欲を制御することは女性を巧みに御することとほぼ同義である。そうした意味において愛欲を制することを勧めるジャータカ、女性が性欲を制しがたいものであると警告しているジャータカもある。過去物語が動物活躍譚となっている例を挙げて

みよう。

第一三話「鏃ジャータカ」：仏は前世に森の神であり、雌鹿のために命を落とした雄鹿を見て、愛欲、女性の支配を諫めた。

第三四話「魚ジャータカ」：仏は前世に宮廷祭官であり、雌魚のために捕まり焼かれかける雄魚を助けた。

第一四五話「バラモンと鸚鵡ジャータカ」：仏は前世に鸚鵡であり、飼い主であるバラモンの妻の乱行を見た鸚鵡であった(14)。

四

仏教教団の人間関係の逸話を語りつつ、人々を救う、仏の偉大さ、素晴らしさ、勇猛さ、賢さを説くジャータカは、ジャータカとしての本領を最も良く発揮しているとも言える。

四の一

仏教教団の統率者、出家者・在家者の指導者である仏が、前世に動物の王、優秀なリーダーであったと語るジャータカは、当然であるかのごとく多い。

第二二話「犬ジャータカ」：仏は前世に犬であり、濡れ衣を着せられて王に殺される同族を救った。

第一一四話「怠惰な二人の修行僧ジャータカ」：仏は前世にミタチンティー魚であり、仲間を網から逃した。

第一一五話「仲間に警告を与えた鳥ジャータカ」：仏は前世に鳥の頭目であり、仲間に警告を与えた。

第一一八話「鶉ジャータカ」：仏は前世に賢い策によって籠から逃れた鶉であった。

第一二八話「鼠の王ジャータカ」：仏は前世に仲間を救った鼠の王であった。

第一二九話「鼠を騙すジャッカル・ジャータカ」：仏は前世に仲間を救った鼠の王であった。

第一三三話「火炎ジャータカ」：仏は前世に火炎から仲間を救った鳥の王であった。

第一四〇話「烏ジャータカ」：仏は前世に仲間を救った烏の王であった。

第一七七話「ティンドゥカの実ジャータカ」：仏は前世に猿王であり、ティンドゥカの実を採ろうとして人間に襲撃されそうになった猿の群れを救った(15)。

四の二

仏の偉大さ、勇猛果敢さは、ときとして敵国に攻められた一国の難を救う勇者としての動物に託され語られている場合もある。

第二三話「駿馬ジャータカ」：仏は前世に駿馬であり、勇敢に戦ってバーラーナシーを国難から救った。

第二四話「良馬ジャータカ」：仏は前世に良馬であり、勇敢に戦ってバーラーナシーを国難から救った。

第一五六話「象王ジャータカ」：仏は前世にバーラーナシー国の王子であり、父王の友であった象によってバーラーナシー国を守った。

四の三

仏の威力は、ときとして体力、腕力という具体的なあり方で理解され、力強い動物に託されて語られることもある。

第二九話「黒牛ジャータカ」：比類無き力を持つ仏は、前世に黒牛であったときにも、その力によって自分を育ててくれた老婆の恩に

報いた。

四の四

真実を述べ誓うことに威力が伴うとするインドの呪術的思想[16]があるが、これは仏教にも及びジャータカに例が多いことで知られている。この節の最後に、真実の誓い手を前世に動物であった仏としているジャータカを挙げておきたい。

第七五話「魚ジャータカ」：仏が前世に魚の王であったとき、真実の誓いによって雨を降らせ、生き物達を救った。

第三五話「鶉ジャータカ」：仏が前世に鶉の雛であったとき、真実の誓いによって森の火事を消し止めた。

おわりに

『ジャータカ』はパーリ語で伝わる上座部仏教の聖典の一つである。そこには仏の偉大さを讃えることを究極の目的とする全五四七のジャータカ説話が集成されている。これらは現在物語、過去物語、連結から成る、非常に特徴的な枠物語である。ジャータカの過去物語には動物を登場人物とするものがきわめて多い。過去物語における動物達の活躍、人間（動物）関係が、連結の働きによって、現在物語における仏を中心とする人間関係に当て嵌められてゆく。言ってみれば、ジャータカの文学においては、語りが現在物語・過去物語を往来することによって、時間軸を超越した人類・異類、異類・人類の生存の交流がさまざまな形で行われているのである。

最後に、ジャータカと日本の説話文学との関わりについて少しばかり言及しておきたい。ジャータカは、パーリ語『ジャータカ』において最も纏まった数・最も整った形のものを見ることができるが、サンスクリット語で伝わるものもあり、漢訳仏典にもかなりの数のジャータカ、本生譚が収められている。日本の仏教説話のうち、相当数が漢訳仏典から流入したと推定されるが、その具体的な文献上の経緯を辿ることはしばしば至難・不可能である。また、日本文学に入った本生譚は漢訳仏典の本生譚よりさらに不整形であって、ほとんどの場合、現在物語・連結の枠組みを失っており、もともと過去物語であった部分のみを説話全体の姿としている。『三宝絵』上巻の本生譚群は、枠物語としての本来の形をかろうじて残した希有の例である[17]。その『三宝絵』においても、本生譚は仏一人の過去・現在の生存の関係を説明するものとなっている。したがって、インドのジャータカにおいて見られた、人類と異類の間のおおらかな生存の交流は、日本文学に流入したのちにはほぼ見られない。それは、一つには文学を超えた人類と異類の関係、人間の動物観によると考えられるが、もう一つには枠物語という文学作品の構造を失ったことに大きく起因することである。

注

(1) 『リグ・ヴェーダ』一〇・九五、『シャタパタ・ブラーフマナ』一一・五・一。田中於菟彌『酔花集―インド学論文・訳詩集』（春秋社、一九九一年）一九七～二一三頁。上村勝彦『インド神話』（東京書籍、一九八一年）三八～四一頁。

(2) 批判版『マハーバーラタ』三・一九〇、上村勝彦訳『原典訳マハーバーラタ』第四巻（筑摩書房、二〇〇二年）六四～七四頁。

(3) 上村勝彦『インド神話』一七二～一七六頁。

(4) 平岡聡『ブッダが謎解く三世の物語―『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳―』上（大蔵出版、二〇〇七年）、二五七頁。

(5) V. Fausbøll (ed.), *The Jataka together with its Commentary,*

Being Tales of the Anterior Births of Gotama Buddha. 6 vol. London, 1877-1896. 中村元監修・補註『ジャータカ全集』（春秋社、一九八四年～一九八八年）。

(6) ジャータカとアヴァダーナとの区別は必ずしも明確ではない。しかし、それぞれの述べるところの重点の一つは、ジャータカでは現在と同様の仏の偉行が過去においても行なわれていること、アヴァダーナでは因果応報の関係が確実であること（善業に善果、悪業に悪果のあること等）だと考えられる。平岡聡『説話の考古学―インド仏教説話に秘められた思想―』（大蔵出版、二〇〇二年）、三四～四一頁。なお、『ジャータカ』第一八話「死者の供物ジャータカ」（バラモンが羊を殺して羊に生まれ変わる。羊がその因縁を別のバラモンに説く）はアヴァダーナ的性格のジャータカである。

(7) 例えば、第三八話「青鷺ジャータカ」、第二一五話「亀ジャータカ」の過去物語と同類型の説話が『ヒトーパデーシャ』第四話にある。

(8) 第二五四話「籾糠を食べるシンドゥ産小馬ジャータカ」（サーリプッタ）、第二七二話「虎ジャータカ」（コーカーリカ、サーリプッタ、モッガラーナ）、第二八一話「真中のマンゴー・ジャータカ」・第二九二話「スパッタ・ジャータカ」（ラーフラ、サーリプッタら）、第二八三話「大工猪ジャータカ」（ある長老、パセーナディ王ら）、第二八四話「吉祥ジャータカ」（アナータピンディカら）、第二九六話「海ジャータカ」（ウパナンダ）、第三〇〇話「狼ジャータカ」（ウパセーナ）等。

(9) 『三宝絵』上巻第九話は同類型の説話であり、漢訳仏典に多く見られる説話のタイプを取っている。

(10) 第二〇八話「鰐ジャータカ」、第二二四話「鰐ジャータカ」はほぼ同じ話。『今昔物語集』巻第五第二五話は、騙される動物を鰐から亀に取り替えた同類型の説話であり、漢訳仏典に多く見られる説話のタイプを取っている。日本にも伝来したのち口承文芸世界に広く伝播し、「猿の生き肝」、「海月骨無し」といった名前で知られている。

(11) デーヴァダッタを批判する動物活躍譚ジャータカは、他に例えば第二二二話「チューラナンディヤ猿ジャータカ」、第一一三話「バラモンを騙すジャッカル・ジャータカ」、第一六八話「鳥ジャータカ」、第二〇九話「鷓鴣ジャータカ」、第二四一話「サッバダータ・ジャッカル・ジャータカ」、第二七七話「羽毛を持つものジャータカ」、第二九四話「ジャンブ樹の実を食べる者達ジャータカ」、第二九四話「最低の者ジャータカ」等。

(12) 『今昔物語集』巻第五第一三語は同類型の説話であり、漢訳仏典を含めインド文献に多く見られる説話のタイプを取っている。

(13) 『今昔物語集』巻第五第二四語は同類型の説話であり、漢訳仏典を含めインド文献に多く見られる説話のタイプを取っている。増田良介「今昔物語集巻五第二四：亀、鶴の教を信ぜずして地に落ち甲を破る話」（『別冊行動と文化』第二号、一九九四年）。

(14) 何らかの徳目、教えを説く動物活躍譚ジャータカは、他に例えば第三二話「踊りジャータカ」、第三三話「和合ジャータカ」、第二二六話「梟ジャータカ」（時宜を心得て行動せよ）。第一三六話「黄金のハンサ鳥ジャータカ」、第一六四話「母を養う鷲ジャータカ」（身内の者を養うべき）。第三八話「青鷺ジャータカ」（奸計は成功しない）。第四六話「園林を荒らす者ジャータカ」・第二六八話「園林を壊す者ジャータカ」（愚かであること・知恵の無いことは良くない）、第二三六話「青鷺ジャータカ」（詐欺師に気を付けよ）、第二五五話「鸚鵡ジャータカ」・第二七四話「貪欲ジャータカ」・第二七五話「素晴らしいものジャータカ」・第二七八話「水牛ジャータカ」（貪欲であるなかれ）等。

(15) 専ら仏を賞賛する動物活躍譚ジャータカは他にもある。微妙な例としては第三二二話「物音ジャータカ」等。

(16) 若原雄昭「真実（satya）」（『仏教学研究』第五〇、一九九四年）。

(17) 拙著『三宝絵本生譚の原型と展開』（汲古書院、二〇〇八年）一六～一七頁。

（なかむら・ふみ／小樽商科大学）